

そこで先ず「存在的方法」であるが、古代に於けるアリストテレスが其典型的な代表者である。其伝統は西洋哲学の殆ど全体を支配し、殊に中世のスコラ哲学に於て其影響は著しかった。現代の哲学に於てはハルトマンが此存在論的方法を最も多分に採入れて居る如く思われる。

アリストテレスは変化運動の世界の原理を論ずる哲学の部門としての自然学に対し、普遍恒常の存在の原理即ち存在それ自体を認識する哲学の部門を第一哲学と称した。それに関する彼の著述が彼の死後彼の学派に属する人の手に由って編纂せられる際、自然学の次に配置せられて、「自然学の後の書」と呼ばれた。それから自然学以上の学(後というギリシヤ語は「以上」という意がある)という意味に於て第一哲学が形而上学と称せられるに至った。形而上学は存在自体の学として内容上存在論に外ならない。この名は近世の初から用いられたものといわれる。アリストテレスの存在論の特色は、第一に存在はロゴスに於て捉えられるという所にある。即ち論理によって存在が認識せられるというのである。此点に於て論理の哲学的認識に対する無力を強調

した神秘主義と正反対の位置に立つ。(この傾向はいずれの思想宗教界にも見られる。仏教に於ても俱舍論と禪宗、儒教の朱子学と陽明学など)これが希臘精神の特色たる主知主義の典型的代表たる所以である。前に述べた如くロゴスは(語る)より来た語として第一に語られる言葉を意味し、第二に言葉の表現する思想を意味する。然るに語られる思想は存在の意味、存在の性格を顕わす。是れ存在と思想は同じ理法(性)を含むからである。即ちロゴスの第三の意味として存在の理法が現れる。存在と思想とは同じロゴスの異ったあり方に過ぎぬ故、換言すれば我々の思想の原理が同時に存在をして存在たらしむる理法に外ならないからロゴスに由って存在が捉えられるのである。(神道に於ては語る以前の音、響に存在を捉える。音打はそれぞれの音によって、その存在の価値、性を識るのである。成り出する神は、鳴り出する神であり、これを言霊と理解する。後述する)斯くて存在の原理を明にすることは我々の理性の自覚をなすことに帰する。アリストテレスの論理が所謂形式論理の如く単に対象を思惟する際に思惟が従う所の形式的なる法則を意味するのでなく、存在に於ける理性の自覚の原理に外ならないことは是に由って認められる。存在論的方法は理性の自覚として論理に由り存在の構造を分析する方法である。存在のロゴスの展開が理性の自覚として論理の媒介に由り行われる。斯くて論理を理性の自覚として直接に存在の原理とするのである。

第二の特色として飽くまで具体的なる個体を哲学の出発点とすることである。これは或意味に於て第一の特色と対立する点を有する。何となれば論理に於ては普遍が特殊の根柢になるのであって、普遍は本性上先きである。然るに我々

古事記

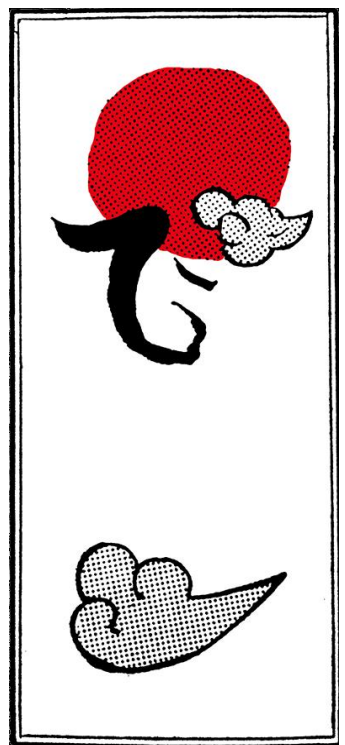
宇宙の創始

— 実在 — (五)

反省的方法

— 存在論、アリストテレス

竹葉 秀雄



第 51 号  
 月 1 回 発 行  
 ひの心を継ぐ会  
 〒799-1336  
 住所:愛媛県西条市  
 上市甲 720-1  
 TEL:080-2986-0856

綱 領

- 私達は明德を明らかにします
- 私達は国家の鎮護となります
- 私達は大和世界を建設します

は斯く本性上先きにある普遍を特殊の個体に先立つて認識することは出来ないで、個体から出発しなければならぬ。即ち我々に対しては個体が先きだからである。アリストテレス以来一般に哲学に於て用いられる「事物の本性上先き」と「我々に対して先き」との区別がこれである。両者は方向上対立する。我々は哲学に於て我々に対し先きなる特殊の個体から出て却て本性上先きなる普遍に達し、翻つて斯かる普遍の原理から特殊を根拠付ける。(例えば仏教に於ても釈迦が一個有情のものの生老病死の無情を感じて入山得道して涅槃を識り、下山して色即是空、空即是色、衆生本来仏の道を説いて衆生を済度した) 哲学的認識は斯かる円環に由つて普遍の原理と個体とを間隙なき統一に結合することに於て成立するといわれる。

今少し具体的にアリストテレス存在論の内容を見ることにする。

## 農士道

### 第五章 農士論

#### 第二節 帰農的安立

#### 隣の牡丹餅

俗諺にも、隣の牡丹餅はうまいというように、すべて他人の職業は美しく見え勝ちなものである。然し何の職業でも功德天だけあって黒暗天の無い仕事というものは無い。若しありと思うならば、思切つてそれに転業するとして考えて見るがよい。例えば、農業はどうも働くことが辛いから、何とか働かずに一攫千金のうまい仕事はないかというので、株や定期の投機的事業にでも手を出したとせよ、一朝にして数千金を得るかもしれぬが、又、一朝にして数千金を失うものである。単に最小の労力を以て最大の利益を得たいというのなら、思い切つて泥棒をするのが最も手近であろう。然し、それには何時でも牢獄行きを覚悟せねばならぬ。肥馬に鞭打ち、胸間燦然たる勲章を輝かして意気揚々として三軍を叱咤する將軍の姿は誠に嬉しくも望ましい。然し其処に至る為には、命令一下何時如何なる場合に於ても敢然として死地を踏み来らねばならぬのである。それを軍人の功德天的一面のみを冀い、黒暗天の一面は之を追い出そうとして、おれは軍人になつて勲章は欲しいが死ぬ事はいやだ。死んだり傷ついたりすることの無い様な場所だけ出して貰つて、人よりは立派な勲章を貰うようにというようなことをいった処で、それは望み得ないことではないか。一切の職業皆然りである。長所だけあつて短所の無い仕事というものは断じてあり得ないものである。それも単に二年や三年という短い間で無く、我が一生、乃至は子孫の時代的事まで考えて見れば能く肯かることと思う。明の方正学の息耕軒記の中に述べてある。

#### 息耕軒記

于越の野に如何にも楽しげに耕している老農がいる。私は問うた。

「あなたはそんなに苦勞して、それでどうしていつもそんなに楽しげなのですか。」  
之に対して老農は答えた。

「君はわしを苦勞しているというのか。なんて分らぬ人間だろう。世間の所謂えら

い人々の生活を見よ。礼装とか制服とか窮屈なものを着て、へっつくばったり、固く  
なったりしているではないか。これは形労(形をつくろう苦勞)というものじゃ。  
色々な書物を漁り遺言逸典を目を皿の様に研究して見るが疑問だらけで何  
等獲る処が無い。これは学勞(学問をする苦勞)というものじゃ。又、種々の学説や  
理論をつつき廻って、それらの間から怪を逞しうし奇を述べて、己の名の売れんこ  
とに苦心している。これは名勞(名を獲る為の苦勞)というものじゃ。役人が地方に  
いることを嫌がって、早く都の官庁に栄転せんことを願ひ、其の為に随分上役のご  
機嫌を取ったり、気苦勞したりする。これは官勞(役人の苦勞)というものじゃ。是  
等の苦勞も亦仲々容易のことではあるまい。苦勞は何もわし一人ではないよ。だか  
らそんな事は聞くだけ野暮というものだ。」

まことに老農の言の如くで、如何なる職業でも其の長短共に十分に之を明らかに  
殊に其の短所に就いて十分の諦めが出来て其の苦難に耐えるだけの覚悟が出来な  
ければ、決して其の事に安立し得るものではない。「切り結ぶ太刀の下こそ地獄な  
れ、身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ。」苟くも武士として立とうという者には、何  
時でもの刃下に身を捨てるの覚悟が定まらぬ限り、決して安立出来るものではな  
い。農士の生活も亦然りである。捨てるものを捨てるが故にこそ生き得るのである。  
「散る時は浮かぶ時なり蓮の花」の法句、味い得て妙ではないか。

### 第三回日本自治集団会合

三浦 夏南

今月も大阪にて日本自治集団の会合が開かれました。我々は私と弟の二人で参  
加しました。前日は淡路島に行き、自治集団のメンバーの一人の農場を視察させ  
て頂きました。これから同じ自治集団の農を興して行く同志として協力してい  
たいと思っています。淡路島は北部と南部で文化がかなり違わしく、農業的には、  
北部はパソナの影響力が強まっているようです。最終的には農を完全に掌握する  
ことこそが、経済的完全勝利に直結することをパソナは知っています。食料を押さ  
えてしまえば、人々は実質的に自立することが不可能な状況に陥ってしまうので  
す。それを良く知っている大企業は、今は利益がそれほど出なくても農の業界に  
続々と参戦しています。北部を侵食するグローバルイズムに対して、南部に住む地域  
の方々への支援を頂きながら、農を興して行く運動を淡路島で始めて行かれるよう  
です。我々もまだまだ素人ですが、農の現場で五年間は生存して来ているので、  
我々に出来ることがあれば、協力していきたいと思っています。

翌日は会合でした。前日から関西に入っていたので、早めに会場に着くことが出  
来、会合前に自治集団のメンバーと色々話すことが出来ました。会合では始めに  
我々の自立自給的農を興して行くというプロジェクトに賛同支援が現段階でどれ  
くらい集まっているかを説明し、まだ不十分ではあるけれども、調査研究を開始で  
きる段階にあるので、取りあえず動き出した旨を伝えました。自立自給的農は  
今行われている商業的農とは全く異質のもので、全てが手探りになります。と  
にかく動き出さないと何が分からないかも分からないということになってしまいま  
す。それに対して、農ばかりを応援するのはいかにがなものか、一部の人たちだけで  
走って行くことになりはしないかとのご意見もありました。やはり現場に近い人達  
にとっては農こそが急務であることが身に迫るものとして感じられているのですが、  
都会で企業経営をされている方等、現場から遠ざかっている人たちには、何故「農」  
なのかということがピンと来ないようです。ピンと来ている人はとにかく早く動き  
たいし、ピンと来ていない人は良くわからないという状況で、その人数が半々といっ  
た具合です。我々としては自治を行う上で「農」を再生することが根本であり、急

務であり、動きださなければ何も始まらない性質のものである以上、農の現場を分かっているメンバーで走り出したいと思っています。ここに関する完全合意は現在とれていませんが、リーダーの荒谷さんのむすびの里、淡路島で農業をされている方、アフリカで村づくりをされている方、加えて愛媛県で農業をしている我々、すでに農業に着手していて、拠点になり得るメンバーがいるので、何とか形にしていきたいと思っています。

もう一つ議題が上がったのは、自治集団のメンバー内だけで通用する通貨を作れないかということです。その際に基準となる価値を「米」に定めて、現行の金融中心の経済ではなく、農本的な共助の経済循環が限られたメンバーの中であらわれるのではないかの提案です。これは農のプロジェクトのように現場に入っている人とそうでない人の温度差が出にくい取り組みなので、面白いとは思いますが、一番肝心な部分である価値基準をどこに定めるかということが明確でなければ、結局資本主義の中に小さな資本主義を作ることになってしまいます。つまり基準となる「米」の価値が金融商業を押さえ、農林水産、職人の手仕事を伸ばしていく設定でなければ、外貨を稼いでくることのできる資本主義的に強い産業にいる人たち中心の経済体系になってしまいます。これでは何の意味もありません。こちらについても結局「農本」ということの意味が理解できていなければ、なかなか話が進まないと思います。こちらの議論も始まったばかりなので、これから論じて行くことになると思いますが、先述の農のプロジェクトと同じく、現場の人とそうでない人の温度差を感じる結果になりました。

とにかく動き出して見れば、良い結果も悪い結果も出て、何を改善していくべきかが分かってくると思います。机上での議論をいくら繰り返しても、相手が自然であり、現場仕事である以上何も始まりません。我々は完全な現場の人間なので、とにかく動いて形にしていくことに専念していきたいと思っています。



### とよくも農園だより

三浦 美恵

梅雨入りが遅れて気温もあまり上がらず、昨年と比べて過ごしやすいい一月となった今月は、初めての事をたくさん行いました。まずは初めての田植え。田植え機自体は香川にある父の実家から譲り受けて軽トラで運んできていたのですが、お米をする田んぼや時間に余裕が無く、なか

なか始められていませんでした。幸運なことに今年はずっと田んぼに適した土地と苗を頂く機会に恵まれ、また代かき、水入れなどの分からない事を、親切な地元の方に教えていただいたことで、ようやく今年、念願の田植えをすることができました。最後にみんなで手植えも行い、子供達も大はしゃぎです。田植え後は毎日水の様子を見に行き、水が減っていないか、順調に育っているかを観察します。今後の栽培方法や収穫はまだ分からない事もあり、不安が残りますが、自給自足の中で柱となるお米をついに植えられたことに大きな喜びを感じます。

次に麦の収穫・脱穀・精選を行いました。全て手作業で刈り取り、地元の農家から借りした足踏み脱穀機で脱穀し、ふるいにかけてゴミを取り除き、最後に唐箕で粳殻を飛ばしていきます。全て今は機械化されており、それだけ手間のかかる作業です。一日かけてバケツ一杯ほどの麦を収穫・脱穀・精選できた時はとても嬉しく、麦一粒一粒が愛おしく感じられました。子供達も汗だくになりながら一生懸命お手伝いします。やは

り子供達も麦の脱穀などの自給自足的農業の方が楽しいようで、いかに足踏みを頑張ったか、どんな風に籾殻が飛んでいたかを、晩ご飯を食べながら畑に行っていない家族にも熱心に話していました。



例年に比べて暑くないとは言え、やはり農作業をしているとよく汗をかきようになりました。暑くなってくると農作業の合間に飲み物が欲しくなります。毎年近所で梅を育てておられる方や大洲に住む主人の祖父が下さる梅を今年も漬

けて、梅ジュースを作りました。子供達も「美味しくなあれ」と言いながらかき混ぜて砂糖が溶けるのを楽しみに待っていました。ようやく完成し、疲れた農作業の休憩に一杯の梅ジュースを飲んで乾いた喉を潤します。休憩しながら「梅も自給したいね」など今後の自給自足の予定を話します。

まだまだ完全な自給自足には遠いですが、実際に自給自足的な暮らしをしている方にお話を伺ったり、主要作物である米・麦に着手できたりと、確実に一歩ずつ前進していることに喜びを感じます。来月は初めての大豆・小豆の定植予定です。アスパラガスも今年最高収量を記録しており、その朝夕の収穫や、ネギの収穫・手入れもしながらなので、作業時間は限られています。優先順位を考えながらやれることを選んで精一杯やっています。家族



全員一日が終わると泥だらけの汗びっしょりで家に入り、美味しいご飯とお風呂に癒され、家族全員で農業が出来ることに感謝しながら夜は子供と同時にぐっすり眠る毎日です。本格的な暑さが始まり、日中の作業が厳しくなってくるので、大人も子供も熱中症に気を付けながら、来月も頑張りたいと思います。

★今後の予定

先月に引き続き個別での勉強会の対応をさせて頂いています。ご希望の方は事務局までお電話ください。

総会を七月十七日(日)十一時～十三時に愛媛県護国神社・神楽殿にて行います。

★一燈照偶 万燈照園

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

★年会費

- 一般会員 三千元
- 賛助会員 一万円
- 特別賛助会員 三万円
- 支援会員 一万円